

学位論文審査の要旨

学位申請者	官本 香織 ジェンダー学際研究専攻2015年度生	論文題目	Factors Restricting Occupational Expectations of Japanese Females - Results from International Comparisons -
審査委員	主 査:	永瀬 伸子 教授	学位論文の全文公表の可否 : 可 「否」の場合の理由 <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある <input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について
	副 査:	西村 純子 教授	
	副 査:	脇田 彩 助教	
	審査委員:	大森 正博 教授	
	審査委員:	杉野 勇 教授	
学位名称 (英語名)	博士 (社会科学) (Ph. D. in Social Science)		インターネット公表

学位論文審査・内容の要旨

	<p>本論文は、日本の女子高校生の職業期待(occupational expectation)が男子高校生より低く、それが国際的にみても特段に低いことに焦点をあて、関連文献をレビューした上で、その要因をPISAデータによる量的分析、日英女子大学生の48名の質的調査から明らかにしたものである。</p> <p>第1章では、先行研究をサーベイした後、女性の地位借用論、制限と妥協、日本の二重労働市場を取り上げ、さらにBronfenbrennerのミクロ・メソ、エックソ・マクロシステムという概念的枠組みを用いることを提示する。第2章はデータについてである。</p> <p>第3章ではPISA2018年データにおいて15歳の高校生が回答する将来の職業期待(Occupational Expectation)を、ILOの国際標準職業分類(ISCO)とガンゼブーム等による国際的職業社会経済的ステータススコア(ISEIスコア)とマッチさせ数量化することにより、先進国36か国の15歳の男女の職業期待のISEI職業スコアの先進36か国の分析をする。日本は男子平均60.1、女子平均55.6であり、日本の女子スコア平均が男子より有意に低いのは36か国中日本のみであり、また女性の期待職業の7位に日本は「主婦」が出てくる点も他の国と異なる。ISEIスコアの決定因を、数学と国語の点数、大学進学予定かという個人要因、父母の職業と学歴(大卒かどうか)というメソ要因を説明変数として36か国の分析を行う。なぜ男女差が大きいのか、それぞれの国でOaxaca-Blinder分解を行うと、日本では、男女で係数の有意差はなく、大学進学予定者の割合と数学平均的が男子学生より女子学生が低いことが女性のISEIスコアを下げる要因だと示す。</p> <p>第4章では、労働市場のあり方や主婦に対する評価などマクロ要因の影響も取り入れて検討をする。36か国の男女全体を分析対象とし、被説明変数は女子個人のISEIスコアを当該国の男子のISEIスコア平均で標準化したものとし、第3章と同じ説明変数に加えて、国ダミーを入れる。その上で、推計された国ダミーの係数を被説明変数とし、改めて、男女賃金差、男女管理職比率、男性の家事時間、主婦は働いている女性と同じくらいに有意義であるという価値規範の36か国の国別平均値で回帰すると、その説明力は国別ダミーの係数の変動の半分近くを説明することを示す。いいかえればたとえば男女賃金差が大きいなど、女性の職業投資の効果が小さい国ほど、男子に対する女子高校生のISEIスコアの切片を下げ、職業期待を下げるものが明らかになった。さらにマルチレベル分析の手法を用いて、個人の点数や親のISEIスコア、国別の男女賃金差を同時に説明変数として推計すると、男女賃金差の影響は係数はさほど大きくはないが有意であり、また国によって明らかに構造が異なることが示される。</p> <p>続く5章、6章は事例研究としての日英比較である。第5章では特に日英の労働市場を比較し、日本に比べて英国の方が仕事時間の柔軟性があり、日本が子どものいる女性が主に時短やフレックスタイムなどを使っているのに対して、英国では子どもの有無や男女にかかわらず、柔軟な時間で働く者が男性でも4人から5人に1人程度いることを示す。</p> <p>第6章は、48名の女子大学生の聞き取りの分析である。日英ともにスノーボールで集めたサンプルであるが、英国21名はRussellグループ(難関大学)の学生が多く、日本28名は国立私立(難関から中堅、北海道から九州)を対象としている。英国の方がISEIスコアの高い職業を望む女子大生が多く、STEM系の職業希望も多かった。また親が男女で異なる期待をすると日本の女子大生の数人が語る一方、英国ではこれはなかったとする。英国の対象者は夫婦とも英国人である者は9名と少数であり、親の一方が日本人である者が5名いたが、日本人との国際結婚の子どもも日本では男女で社会の期待が違うと感じるとする。また日本の女子大生の方が子育て期のワークライフバランスに対する不安が強く、職場に男女差別があると思っている者が多かったことも指摘される。</p> <p>日本の女子高校生が、国語、数学、理科の点数ともに先進国の中でトップクラスにもかかわらず、先進国の中で職業期待がもっとも低いという点を示し、その理由に男女賃金差やジェンダー規範など社会構造がある点を量的、質的に示した。特に質的調査からは、女子大生の出産後のワークライフバランス不安は日本は英国に比べて大幅に高いこと、実際に英国は男女や子ども有無にかかわらず仕事時間の柔軟性が高いのに対して、日本は有子女性に限られていることを示し、日本の若い女性の職業期待が低くなる社会構造の問題を国際比較の中で学術的に明快に示した。</p> <p>審査会は、12月1日、1月19日、2月8日に行われ、理論、数量分析や日英統計に関する指摘が行われた。修正が適切に行われた後に、2月20日に公開審査会と最終試験が行われた。最終試験では質的調査分析のさらなる深化の期待が述べられたが、博士論文として意義や知見は明確でクリアあり、十分な水準に達していると全員一致で判断し合格とした。</p>
--	--